〈研究ノート〉

多文化共生社会における地域振興構築に向けてのマインド形成

林　　翠芳
大塚　　薫

要　旨

本取組みは事前学習並びに体験学習を通して地域の現状や課題・地域の取組みを理解し、多文化共生社会において地域振興をどのように推進していくべきか、学生の目線から課題を見付け、その解決策を考え、地域の活性化に寄与することを目的としている。

2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響で交換留学生の受入れが中止されたため、受講生15名のうち日本人学生14名と留学生１名による国際共修授業が行われた。授業の前半は地域の現状及び課題を認識するため、ビジターセッションで県の産業政策や中山間地域の過疎化の現状を学び、東部地域の中心都市で高校生との交流を中心とした体験学習が行われた。そして、授業の後半は多文化共生社会における地域振興を中心に異文化理解教育や県の外国人受入れ政策、新型コロナウイルス禍における企業文化の変化に関する学びを深め、地元の企業見学を行った。

受講生の終了アンケート評価の結果、一連の授業の活動の満足度は５段階評価中4.3で高評価を博した。本授業を通して受講生個々人が地域の現状や課題を認識し、自分事として地域との互恵関係の構築や多文化共生社会における地域振興について解決策を提案するに至ったと言える。

【キーワード】
多文化共生社会、地域文化理解、異文化理解、地域課題、地域振興

１．はじめに

本取組みは事前学習並びに体験学習を通して地域の現状や課題・地域の取組みを理解し、多文化共生社会において地域振興をどのように推進していくべきか、学生の目線から課題を見付け、その解決策を考え、地域の活性化に寄与することを目的としている。

また、本研究課題で取り上げる体験的な教育活動の手法は、体験・実践を

通して学生の企画力、行動力、コミュニケーション力、グローバルな視野等の基礎的・汎用的能力を培う効果があり、異なる文化、異なる価値観にぶつかる社会体験を通じて、心身ともに鍛えられ、主体的な学びを促し、「教育の質的転換」が期待できると考えられる。

本研究課題は今回で４年目の実施となる。１回目は2017年４月から７月にかけて、地域課題に関する体験型プログラムの一環として高知大学国際連携推進センターの日本語総合コースにおいて「地域文化理解」の授業を実施した。体験学習では①大豊町での茶摘み体験・地域住民へのインタビュー活動及び交流、②浴衣着付け体験・ひろめ市場にてインタビュー・日曜市自由見学、③朝倉神社夏越祭り参加・朝倉神社夏越祭り会場にてインタビュー活動の三つの内容で構成され、受講生は留学生のみであり、体験学習型授業の構築、アクティブ・ラーニング型授業の設計を柱に据えた。２回目は2018年10月から12月にかけて高知大学の正課の授業として共通教育の社会分野科目において「地域文化理解」の授業を開講し、留学生のみならず日本人学生も加わり、留学生と日本人学生の国際共修型授業の構築に向けて、体験学習活動を中心に据えた授業を展開した。体験学習では①安芸桜ヶ丘高校、安芸高校の生徒との交流・昼食作りを通した地元の方との交流・高校生による観光ガイド、振り返り活動（ポスターセッション）、②高知城歴史博物館及び高知城見学・日曜市見学・ひろめ市場でのインタビュー活動、③大豊町での餅つき体験・地域住民へのインタビュー活動及び交流の三つの内容で構成され、受講生が地域の方との交流や体験活動を通して地域の活性化について考えることに重きを置き、「私が考える高知の地域振興」、「高知観光発掘」の二つの課題について考えるものであった。３回目は2019年10月から2020年１月にかけて、同じく大学の正課の授業として共通教育において「地域文化理解」の授業を実施した。体験学習では①安芸市の高校生へのインタビュー活動及び交流活動・高校生による観光ガイド・振り返り活動（ポスターセッション）、②大豊町での餅つき体験・地域住民との相互インタビュー活動及び交流、③城西館（ホテル）・技研製作所見学及び技研製作所社員との交流・インタビュー活動の三つの内容で構成され、体験学習を通した留学生と日本人学生の国際共修授業の構築を柱に据え、「高知の伝統的な産業を活用したさらなる地元活性化の提案」、「高知の産業を振興させるための取組みの提案」の二つの課題について考えるものであった。

４回目となる今回は2020年10月から2021年１月にかけて、２回目及び３回

目と同様高知大学の正課の授業として共通教育で「地域文化理解」の授業が実施された。新型コロナウイルス感染症の影響により2020年４月より協定校から来日する交換留学生の受入れが中止されたため、受講生は正規生の日本人学生が中心となったことやこれまで体験学習に協力してくれていた受入先もコロナの影響により、実施できなかったところもあったことが大きな変更点である。それに伴い、これまで３回実施してきた体験学習は２回に減ったが、代替措置として体験学習ができなかった分については、ビジターセッションの講義で補った。また、従来の地域の伝統的な産業に加えて、「多文化共生社会」という新しい視点で地域振興を考える内容を付け加えた。

多文化共生については、2017年３月に総務省がまとめた「多文化共生事例集～多文化共生推進プランから10年共に拓く地域の未来～」において「外国人の活用等に関する国の方針」が以下のように述べられている。

> 2013年より毎年改訂されている「日本再興戦略」を見ると、国における外国人の活用等に関する方向性が分かる。
>
> 2013年６月の「日本再興戦略」では、「グローバル化等に対応する人材力の強化」としての外国人留学生の受入れの促進や、「高度外国人材の活用」として高度外国人材ポイント制度の見直しが掲げられた。
>
> その翌年の「『日本再興戦略』改訂 2014」（2014年６月）では、経済成長の担い手として「外国人材の活用」が項目立てされ、技能実習制度の拡充等が掲げられたほか、日本への留学生や海外の優秀な人材が日本で働き暮らしやすくするため、中長期的視点に立って総合的な検討を進めることとされた。
>
> 2015年６月の「『日本再興戦略』改訂 2015」においても、海外の優秀な人材の我が国への呼び込みが不可欠であるとされ、外国人材の活用は鍵となる施策のひとつに挙げられている。
>
> このように、外国人は日本経済の担い手として捉えられ、優秀な海外の人材を受け入れることが中心に謳われてきたが、2016年６月の「日本再興戦略 2016」では、初めて外国人の生活環境の整備についても言及された。

高知県は特に山間地域では高齢化が進んでいるため、積極的に技能実習制度を活用している企業や農家も増えてきている。本授業を通して、今後の日本社会・日本経済を担う若い世代が高知県の現状を理解し、多文化共生社会においてどのように対応していくべきかを考える機会とした。また、体験学

習の一環として行われた企業見学は、課題を考えるヒントとなるべく企画されたものであるとともに、将来的には高知で就職するきっかけになるという狙いも込められている。

２.「地域文化理解」の授業概要

「地域文化理解」の授業は、2020年度第２学期に高知大学の共通教育科目「地域文化理解」の授業として「地域の方との交流や体験活動を通じた教育活動を通して、受講生に地域課題を理解してもらうとともに学生の目線から地域の振興を考え、地域活性化の糸口を探ることを目的」に開講された。

16コマの授業において、前半は地域の現状及び課題を認識する内容を中心に展開した。まず、ビジターセッション①では高知県全体の産業やその取組み内容、課題を理解し、県全体の産業政策を学ぶ内容構成で、高知県産業振興推進部計画課の職員に講義にご協力いただいた。また、ビジターセッション②では高知県の中山間地域で人口が過疎化し、高齢者が中心となっている大豊町の現状と課題について、集落活動センター「そばの里　立川」の立川地区活性化推進委員会会長にお話を伺った。そして、高知県東部地域の中心都市である安芸市にある県立安芸桜ケ丘高等学校の生徒との交流を交えて体験活動を行い、安芸市の現状や課題について理解し、高校生とともに町の振興について考える体験型学習を実施した。

後半は前半の高知県の現状や課題を踏まえて、多文化共生社会における地域振興のテーマを中心に授業を展開した。まず、異文化、他文化についての理解が深められるよう、授業担当者による「多文化共生社会における異文化コミュニケーション」に関する講義を行った。そして、ビジターセッション③では高知県商工労働部雇用労働政策課の職員に講義にご協力いただき、１）外国人との共生に向けた取組みとして、外国人材の受入れを想定して2019年度に開設した高知県外国人生活相談センターの１年間の活動状況についての概要や相談状況、２）高知県の外国人材の活躍に向けた取組み（日本政府の施策の方向性や高知県の取組み概要）についてご紹介いただき、全体を通して高知県で外国人が活躍する共生社会や地域振興について考える内容構成となっていた。また、ビジターセッション④では「多文化共生社会における日本ビジネススタイルの変化」というテーマで成蹊大学経営学部鈴木教授に講義（オンライン実施）にご協力いただき、少子超高齢社会を背景とした企業の変化並びに新型コロナウイルス禍の状況下での働き方の変化、さらに日本

企業がこれからどう変わるのか等についてお話しいただいた。企業見学では、外国人材や技能実習生を積極的に受け入れている２社を見学するとともに、「外国人とともに魅力ある会社を目指して」をテーマにしたトークセッションが開かれた。そこでは、株式会社高知丸高代表取締役会長が「外国人材への思い」について、２社に就職された高知大学の卒業生（元留学生）が高知で就職した経緯や理由、高知の魅力について語られた。

受講生は上記の一連の活動を通して最終課題として、私の考える①「地域との互恵関係を構築するための方策」、②「多文化共生社会における地域振興の方策」の二つのテーマの中から一つ選び、グループで発表するとともに自分の考えをレポートにまとめ、提出した。

授業は＜表１＞「地域文化理解」の授業シラバスの通り実施された。

＜表１＞　「地域文化理解」の授業シラバス

実施日	授業内容	実施場所
10.07	協働学習　オリエンテーション、事前アンケート調査	学内（教室）
10.21	協働学習　講義(1)高知県庁職員による「高知県産業振興計画について～高知県の現状と課題～」についての講義	学内（教室）
11.04	協働学習　講義(2)立川地区活性化推進委員会会長による「大豊町の現状と課題」に関する講義	学内（教室）
11.11	協働学習　①高校生が作成した安芸市・高知県等についての紹介動画の視聴、②講義(1)と講義(2)の振り返り	オンライン (Teams)
11.14	体験学習（交流）　①アイスブレーキング（レクリエーション活動を通しての交流活動）、②高校生による観光ガイド、③振り返り活動（ポスターセッション）	学外（安芸市）
11.18	協働学習　①講義(3)授業担当者による「多文化共生社会における異文化コミュニケーション」に関する講義、②11/14の体験学習の振り返り	オンライン (Teams)
12 02	協働学習　講義(4)高知県庁職員による「外国人材の受入れ・共生に向けた取組みについて」の講義	学内（教室）
12.05	体験学習（企業見学）　①株式会社第一コンサルタンツ見学、②株式会社高知丸高現地見学、③トークセッション「外国人とともに魅力ある会社を目指して」	学外（高知市内）
12.09	12/02の講義(4)と12/5 の体験学習（企業見学）の振り返り	オンライン (Teams)
12.16	協働学習　講義(5)成蹊大学経営学部鈴木教授による「多文化共生社会における日本ビジネススタイルの変化」についての講義	オンライン (Teams)
01.06	協働学習　グループ発表の準備	オンライン (Teams)
01.20	グループ発表 私が考える①地域との互恵関係を構築するための方策、②多文化共生社会における地域振興の方策	オンライン (Teams)
01.27	レポート提出 私が考える①地域との互恵関係を構築するための方策、②多文化共生社会における地域振興の方策 事後アンケート調査提出	オンライン (Teams)

なお、本授業を受講した学生は15名であり、内訳としては、日本人学生が14名、留学生（マレーシア出身）が１名である。また、日本人学生は14名のうち、高知県内出身者が２名、高知県外出身者が12名である。

３．地域の現状と課題に関する協働学習及び体験活動

3-1 地域の現状と課題に関する協働学習

地域の現状と課題に関する学習については、まず、ビジターセッション①では高知県全体の産業やその取組み内容、課題を理解し、県全体の産業政策を学ぶ内容構成で、高知県産業振興推進部計画課の職員に講義にご協力いただいた。また、ビジターセッション②では高知県の過疎化した中山間地域において高齢者が中心となって活動している大豊町の現状と課題について、集落活動センター「そばの里　立川」の立川地区活性化推進委員会会長に講義にご協力いただいた。

＜表２＞　ビジターセッション①と②に関する評価

NO		振り返りシート内容	5	4	3	2	1	平均値	回答数	欠席
1	ビジター①	今回の授業に積極的に参加したか	3	6	5	0	0	3.9	14/15	1
	ビジター②	今回の授業に積極的に参加したか	5	6	1	0	0	4.3	12/15	2
2	ビジター①	講義を聞いて高知県の産業に関する理解が深まったか	3	8	3	0	0	4.0	14/15	1
	ビジター②	講義を聞いて大豊町の地域活性化に関する理解が深まったか	6	6	0	0	0	4.5	12/15	2
3	ビジター①	今回の講義の満足度	7	6	1	0	0	4.5	14/15	1
	ビジター②	今回の講義の満足度	7	3	2	0	0	4.4	12/15	2

＜表２＞に示すように、ビジターセッション①では高知県の産業に関する理解、ビジターセッション②では地域活性化に関する理解が深まったと評価され、両講義の内容については4.4以上の高評価が得られ、満足度の高い講義内容であった。

＜表２＞の項目２の「理解の深化」に関する回答の理由として、ビジターセッション①については、「高知の観光について知らなかったことを知ることができた」（地域２年F）、「高知県の産業振興について幅広く概説されたほか、そうした事業に携わる上での本音が聞けた」（人２年M）、「高知県がどのような課題を提起してそれに対してどのような解決策を打ち出しているのか知ることができた」（地域２年F）、「人口減少や若者の県外流出など高知県が

抱えている現状の課題やそれを打開するための地産外商など様々な取組みについて学ぶことができた」（教３年F）、「高知県が問題点に対して何をしているかがよく分かった」（理１年M）、「高知県と他県の観光客の推移の比較などを知ることができ、高知県の現状と課題、また高知県の魅力を改めて知ることができた」（教３年M）等のコメントがあった。また、ビジターセッション②については、「今まで知らなかった大豊のことを知ることができた」（地域２年M）、「映像や具体的な取組みの紹介、実際の数値を用いた説明により、大豊町が直面している現状と課題について、危機感をもって考えることができた」（教３年F）、「大豊町の特徴を動画を踏まえ、詳しくわかりやすく説明してくださったため、大変理解が深まった」（地域２年F）、「地元の人からの生の話が聞けた」（人２年F）、「大豊町と高知市との比較や、現在の取組みについて知ることができた」（農１年F）等のコメントが見られた。

＜表２＞の項目３の「講義の満足度」に関する回答の理由として、ビジターセッション①については、「知らなかった高知のことを知ることができた」（地域２年F）、「実際に事業に取り組まれている方からお話が聞けたこともあり、具体的かつわかりやすい講義だった」（人２年M）、「今の高知の主に観光に関する課題を明確に知ることが出来た」（人２年F）、「普段は消費者として提供されていた取組みが高知県の様々な人々の願いと努力から実現していることを知れた」（教３年F）、「高知の問題点、そしてそれを改善するために何をしているかがかなり分かった」（理１年M）、「高知県の自然的な面での強みなどについて考えたことがなかった視点から見ることができた」（農１年F）等のコメントがあった。また、ビジターセッション②については、「特に人口減、高齢化といった課題に向けてどのように取り組んでいくべきかを学ぶことができた」（教３年F）、「大豊町が今どんな状況なのか、そしてこれから何をしていけばいいかを考えるきっかけになった」（理１年M）、「高齢者が多くいる、子供が少ないなど問題点はある程度知っていたが、その中でも地域を活性化しようと取り組んでいることを知ることができた」（農１年F）、「町の活性化のために尽力している人がいることを知り、自分も何か役に立ちたいという思いになった」（教３年F）等のコメントが見受けられた。そのほか、「とにかく普通の話をきくよりも、地元地域について現場からの視点で話してくれる方が魅力的だ」（地域２年M）、「色々な課題を学んで、満足だと思うが、実際に大豊町の人と交流できなかったのは残念だと思う」（理１年M）のような体験学習への期待のコメントもあった。例年、この授業内で大豊町の地元住民

との交流も兼ねて行っていた体験学習が2020年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により実施不可能となり、代替措置としてビジターセッションで地元の方に大豊町の現状や課題についてお話しいただくことに変更したが、上記受講生のコメントからもビジターセッションを通して高知県並びに大豊町の現状と課題に対する理解が深まったと読み取ることができる。

また、ビジターセッション①の講義を聞いて、「学生目線から高知県の産業振興のために提案できることは何か」の質問に対しては、「対外的な宣伝にはSNSが有効だと考える。県内の観光地や企業の公式アカウントは多く目にするが、まだ知名度が低いものが多く、あまり民間の話題にも上らない印象を受ける。桂浜水族館など、昨今の時勢を掴んだアカウント運営をしている施設を参考に、SNSでのアピールにも力を入れてみてはいかがだろうか。B to Bについての話が講義中に出ていたが、SNS上でアクセスされれば、消費者が商品のことを直接知る機会になるのではないかと考える」（人２年M）、「観光コンシェルジュに聞かなくても楽しみ方の情報を得ることができるシステムについて提案する。家族世代、若者世代をターゲットにインターネットでの情報発信をさらに活発に行うべきであると考える。自分が『〇〇に旅行で行きたい』と思ったときに情報を得るのは、Googleでの検索（〇〇観光）やInstagramでのハッシュタグ検索（＃〇〇観光　＃〇〇グルメ）といった方法が多い。検索結果の一番上に発信したい情報が出てくるように仕組むことがまずは重要であると考える」（地域２年F）、「高知県に多くの観光拠点をつくっていることを知ったが、その数が増えてもインパクトのある観光拠点何ヶ所かを全国に売り出した方が人々の記憶には残るのではないかと感じた。ある一つの観光施設を高知県のおすすめスポットとして広めていけば、その場所が旅行雑誌などで見かける回数も増えるようになり、今まで高知県を観光先として考えていなかった人が行ってみようと思えるようになると思う」（農１年F）、「高知県の環境は農業に優れているので、農業技術の開発が必要だと思う。授業で説明したもの、例えばAIで農業を高効率化することや、IoTで高知が体験している労力不足を解決することが重要だと思う。また、高知県および四国外、もしくは海外への流通経路が足りないと思うので、国際空港や新幹線などの建設が必要だと思う」（理１年M）、「地元の『ものづくり』を行っている会社と学生（大学生）が協働しての新商品の開発、販売を行う」（地域２年M）、「高知県には自然や食などのいいところがたくさんあるが、それらを活かした目を惹くイベントを開催してみてはどうかと思った。

しかし、北海道展や鍋フェスティバルなど東京で開催されているそれらの行事は開催されているから人が集まっているのではなく、もともと人が集まるから開催されているのではないかと思ったため、高知でイベントをすることはあまりコスパが良いことではないのかも知れない」（教３年M）等の具体的な提案があった。そして、ビジターセッション②の「学生目線から大豊町の地域活性化のために提案できることは何か」の質問に対しては、「交流活動について、東京など県外からプロの音楽家を呼んで、音楽祭のような催しをしていると言っていたが、それを高知大学の学生も参加しても良いというふうにすれば、より多くの若者や大豊町を知らない人との交流ができるのではないか」（教３年F）、「田舎に移住を考えている都会の人の積極的な受入れや農業、林業体験、近くの小中学校との交流など」（教３年F）、「私は学部の実習で大豊町とかかわりを持って３年目である。今私が企画として行っていることは、『大豊町の魅力を映像にする』というものだ。学生が見て感じて体験した大豊町の魅力をそのまま映像に映しだすこと、魅力をPRすることは五感をつかって楽しむコンテンツが多い大豊町にとって有効なのではないかと考える」（地域２年F）、「県外などから来る人たちに文化交流や町の人たちとの交流をさせるために観光も含めたツアーを企画する」（理１年M）等のようなアイディア溢れる提案が寄せられた。

3-2 地域の現状と課題に関する体験学習の概要及び評価

2020年度は地域の現状と課題に関する体験学習は２部構成で実施された。これまでは１日かけて高校生との交流を兼ねて体験学習を実施してきたが、今回は感染症防止策の一環として、体験学習を半日にし、高校生が作成した動画の視聴を通して安芸市等について紹介してもらう形で事前学習を行った。

地域の現状と課題に関する体験学習は高知県東部地域の中心都市である安芸市にある高知県立安芸桜ケ丘高等学校の生徒との交流を交えて行われた。交流活動は「地域の魅力再発見」を主軸に、安芸市の現状や課題について理解し、高校生とともに町の振興について考える内容である。具体的な活動として、(1)アイスブレーキング、(2)高校生による安芸市観光ガイド、(3)振り返り活動の３部構成で実施された。(1)と(2)の担当は高校生、(2)は高知大生という役割分担で行われた。(1)アイスブレーキングは安芸桜ケ丘高校の会議室で行われ、４グループに分かれて活動を行った。アイスブレーキング

①では、ジェンガをしながら①名前・趣味、②ニックネーム、③出身県と特産品、④出身県の観光地（おすすめスポット）、⑤おすすめの食べ物、⑥行ってみたい場所（高知県）、⑦行ってみたい国・場所（海外）、⑧今、はまっているものという八つの内容について自己紹介を行い、グループ活動を行った。アイスブレーキング②では全体の活動として「土佐弁○×クイズ」を行った。その後、安芸桜ヶ丘高校の生徒の案内で安芸市の名所である野良時計や武家屋敷、岩崎彌太郎生家を観光した。

観光案内終了後、再び安芸桜ヶ丘高校に戻り４グループに分かれて地域の魅力を再発見し、地域の振興を考えるべくグループワークが行われた。具体的には、一日の活動を振り返り安芸市が地域おこしの面で抱えている課題を踏まえ、その改善策としての地域振興にふさわしい漢字一字を各グループで選択し、それを選んだ理由を皆の前で発表するポスターセッションが行われた。それぞれのグループが選んだ漢字は残存の「残」（Aグループ）、血縁の「縁」（Cグループ）、振興の「興」（Dグループ）、そして、創作漢字「知（る）」と「発(する)」を上下に組み合わせた漢字「鬻」（Bグループ）であった。全てのグループの発表を聞いた各人が相互評価を行い、Bグループの創作漢字「鬻」とCグループの「縁」への投票が最も多いという結果となった。

後日受講生から提出された振り返りシートの一部（5段階評価）を＜表３＞に示す。＜表３＞から読み取れるように、項目６、７、８を除き、その他の項目は平均値が4.0ポイント以上を得ており、体験活動としては満足度の指数が高く、特に一連の高校生との交流活動において高い評価が得られた。

＜表３＞　安芸桜ヶ丘高校との交流活動における評価

NO	振り返りシート内容	5	4	3	2	1	平均値	回答数	不参加
1	今回の高校生との交流活動に積極的に参加したか	9	4	0	0	0	4.6	13/15	2
2	高校生との交流がよくできたか	11	1	1	0	0	4.7	13/15	2
3	今回の高校生との交流活動全体の満足度	7	4	2	0	0	4.4	13/15	2
4	活動評価①高校生とのアイスブレーキングの時間の満足度	7	5	1	0	0	4.5	13/15	2
5	活動評価②高校生による安芸市ツアーガイドの満足度	9	3	1	0	0	4.6	13/15	2
6	活動評価③高校生とのグループワークの満足度	5	4	1	3	0	3.8	13/15	2
7	高校生との交流活動で安芸市のことがよく分かったか	6	4	2	1	0	3.9	13/15	2
8	今回の活動を通して、(他の)留学生との交流が深まったか	2	2	0	1	8	2.1	13/15	2
9	今回の活動を通して、(他の)日本人学生との交流が深まったか	6	2	5	0	0	4.0	13/15	2

その他、記述のみの設問としては、「安芸市をより活性化するには何がポイントか」、「安芸市の観光について、どのようなところを改善したほうがよいか」、「安芸市の観光資源について何か提案があるか」等を設定した。

「安芸市の活性化のポイント」については、「私が考える活性化は観光客数を増やし、安芸市が経済的に潤うことを指すが、そのためにはまず認知してもらうことが一番重要だと感じた。私は今回の交流会があるまで、野良時計や岩崎彌太郎のことは何も知らなかった。そのため、安芸市はマーケティングが弱いのではないかと推測した。なので、まずは、誰が何を通じていつ何で来たのかという具体的なデータを収集する必要があると思う。そして、そのデータを元に的確に情報を発信することが活性化のためのポイントの一つだと考えた。また、観光地という割にはあまりにもお金を落とす場所がないと感じた。そのため、観光地とセットでお金を落とせる場所が必要だと感じた」（地域２年M）、「安芸市は"賑やかさ"が足りないと思う。高知市から見ると、高知市の夜にも例えばひろめ市場、帯屋町などの場所があって、市民の交流を進ませられる。他に、安芸市には交通手段が足りなくて、バスや駅（特に観光地の近く）の数が増えたら、観光客の数が増えるし、安芸市の便利さも増すだろう」（理１年M）、「観光名所の宣伝、人口流出を可能な限り阻止すること。伝えていくこと」（教３年M）、「看板が少ないため観光客に不親切だと感じた。また、交通もあまり整備されていないため、地域活性化をするにはその辺の整備がポイントとなると思う」（教３年M）、「今回の実習で学んだ内容から考えるポイントは『歴史と景観を守るまち』であると考える」（地域２年F）等のアイディアが寄せられ、活性化にはまず多くの人に知ってもらうこと、観光地に行くまでの交通手段を多くする等の提案もあり、安芸市での半日の活動を通して気付いたことが記述されていた。

「安芸市の観光の改善」については、「ホットスポットを作る各観光地に他の観光地の情報が少ないことが問題だと感じた。そのため、他の観光地までの距離や時間を示した看板の設置や、駅にガイドブックを置くなどして安芸市を訪れてくれた観光客には数カ所観光地を巡ってもらえるように工夫すべきだと感じた。また、観光地について調べる際、安芸市のホームページを見たが、見にくいのですぐに改善すべきだと感じた。加えて、他の産業との連携が少ないことがもったいないと感じた。せっかく、『なすプリン』のような商品開発もしているのに、岩崎彌太郎生家の近くにあったカフェぐらいしか買えるところがなかったので、もう少し買える場所があってもいいと感じた」

（地域２年M）、「案内板などの看板をもう少し目立つようにしたり、観光名所の近くに道の駅のような商業施設を作ったりなどして若い人も観光しやすくすると良いと思う」（教３年F）、「一つの観光スポットの周りに少し歩けば他の観光スポットも近くにあったので、それぞれの観光スポットを別々に売り出すのではなくまとめて一つの観光ルートとして紹介していけばもっと多くの人が訪れるようになると感じた」（農１年F）、「観光を車で完結させるようにするのではなく、街全体への波及効果をうむ観光経路の確立」（地域２年M）、「〈情報発信の強化〉と〈更なる景観の整備〉であると考える。歴史や景観はしっかりと残っているが、さらに昔ながらの道の美しさを保っていく努力は必要であると考えた。また、肝心の〈人の呼び込み〉と〈実際に人が来た時のもてなし〉が甘いように感じる」（地域２年F）、「行ってみてわかる良さというものがあったと思う。実際に安芸市の趣ある雰囲気は写真だけでは伝わらない。しかし、写真や映像だけで興味を引けるだけの魅力的な何かが足りないと感じた」（教３年M）等の提案があった。

「安芸市の観光資源」については、「グループワークの中で野良時計はお花畑とセットでインスタグラムで見たことがあるという意見があった。なので、私たちのような若年層を取り込むために、安芸市または、安芸桜ヶ丘高校の皆さんにインスタの運用を提案する。具体的には、美容院のインスタアカウントのようにお客さんの写真を一眼レフで撮影し、それをインスタのアカウントで投稿するというものだ。そして、その写真が欲しいという観光客についてはインスタのDMで写真を提供することで、インスタのアナゴリズムが働き、より多くの人に情報が発信されるようになる。せっかくインスタ映えする観光資源があるのにそれを活かさないのは非常にもったいないので、ぜひそれをSNSを使って発信していって欲しいと考える」（地域２年M）、「歴史については今でもしっかり保存されているからその周りの飲食や広報などもっとお金を落としてもらえる物作りが出来ればいいと思う」（地域２年M）、『高校生のツアーガイド』を提案する。地元の高校生のガイドは付加価値であると考える。高校生が頑張ってガイドしてくれる、といえば少しくらい拙いガイドであっても大人は優しい目で見てくれるだろうし、何より地元の魅力に高校生自身が気づき、愛着を持つことができるきっかけになる。また、高校生のプレゼン能力、情報収集能力はやっていくうちに確実に伸びる。さらに観光客目線で安芸市を客観的に見る視点も持つことができ、安芸市の観光面に更なる可能性を生み出すのではないかと考える。ちなみにこれ

を実行する場合、もちろん高校生には労働賃金が支払われる（その方がやる気が起きる）」（地域２年F）等の具体的な提案も見られた。特に高校生による安芸市の観光ツアーについてはほかにも提案があり、今回の安芸桜ケ丘高校の生徒によるツアーガイドの評価がよかったことを物語っているのではないかと思われる。

＜表３＞の項目５「活動評価②高校生による安芸市ツアーガイドの満足度」については、「高校生らしいガイドで気持ちが和やかになった」、「高校生の方たちのガイドがとてもよく、そのおかげで安芸市のことをよく知ることができたと感じる」、「プロ並みのクオリティ。当然プロと比較されるとミスもあるが、そのミスを補い合えるからこその面白さがあると思う」、「観光資源である歴史について事前によく調べており、案内の順番も適切だと思った」、「かなり詳しく説明してくださった。有名な建物の話だけでなく、街並みの話やなぜ竹でつくられた塀があるのかなどクイズ形式を踏まえながら説明してくれた」、「内容は具体的でありながらまとめられて面白いものが多かった」、「実際に観光名所の現地に立って歴史や豆知識を教えてくれたことによってより理解が深まった。また、細かくてコアな豆知識の情報を収集してクイズを出してくれたことで、高校生のこれまでの準備の努力が感じられた」と多くの受講生が高校生のツアーガイドに対して好評だった。

４．多文化共生社会に関する学習及び体験活動（企業見学）

4-1 多文化共生社会に関する協働学習

本授業の後半に実施された「多文化共生における地域振興」をテーマとした授業は、前半の高知県の現状や課題を踏まえて行われた。まず、授業担当者による「多文化共生社会における異文化コミュニケーション」の授業では、グローバル化が進む現代社会において文化的背景を異にする存在同士のコミュニケーションとして何が大事なのか具体例を挙げながら説明された。ステレオタイプの克服の仕方や文化背景による非言語コミュニケーションの差異等具体的な事例を示しつつ異文化に関する理解を深めるとともに、多文化共生社会において自分のコミュニケーションのタイプを知り、どのように意思疎通をしていけば人間関係の構築に役立つかについての講義が行われた。

本授業を受講した感想としては、「文化や言語が異なる人と接するときには、相手の国の文化についてある程度知っておくことが必要だと感じた」（農１年F）、「自分がこれまで当たり前だと思っていた行動や言葉の『意味する

こと』は場所が違えば異なる可能性があるということを学んだ」（地域２年F)、「日本の文化と外国の文化ではジェスチャーやハンドサインなどの表す意味が明確に違うように、その国の文化や歴史を理解した上で関わりあう必要があると感じた」（教３年M)、「日本で普通に使われているボディーランゲージが他の国ではタブーになることもあるということを知り、他国について知ること、固定観念や自国の文化だけにとらわれないことが大切だと感じた」（教３年F)、「コミュニケーションのタイプのことを知り、とても勉強になった。今後のグループ間の討論などの作業をする時に利用し、より円滑なチームワークをすることができると思う」（人１年M)、「私は相手のことをあまり考えずに自分の意見だけを言って上手くコミュニケーションをとれないことが多いので、Iメッセージなど人と円滑にコミュニケーションを取るための方法が知れてよかった」（教３年F）等のコメントが寄せられ、異文化コミュニケーションの概要が理解できたことが分かる。

＜表４＞はビジターセッション③と④に関する授業評価であるが、平均値はいずれも4.0ポイント以上の評価が得られた。

＜表４＞　ビジターセッション③と④に関する評価

NO		振り返りシート内容	5	4	3	2	1	平均値	回答数	欠席
1	ビジター③	今回の授業に積極的に参加したか	5	4	3	0	0	4.2	12/15	1
	ビジター④	今回の授業に積極的に参加したか	3	5	3	0	0	4.0	11/15	1
2	ビジター③	講義を聞いて高知県の多文化共生に向けた取組みに関する理解が深まったか	3	8	1	0	0	4.2	12/15	1
	ビジター④	講義を聞いて日本企業の働き方の変化に関する理解が深まったか	4	6	1	0	0	4.3	11/15	1
3	ビジター③	今回の講義の満足度	5	6	1	0	0	4.3	12/15	1
	ビジター④	今回の講義の満足度	5	5	1	0	0	4.4	11/15	1

注：ビジター③授業出席者は14名、うち２名無回答。
ビジター④授業出席者は14名、うち３名無回答。

ビジターセッション③では、1)外国人との共生に向けた取組みとして外国人材の受入れを想定して2019年度に開設された高知県外国人生活相談センターの１年間の活動状況や相談の概要、2)高知県の外国人材の活躍に向けた取組み（日本政府の施策の方向性や県の取組み概要)、そして、各産業分野共通の課題として出てくる担い手対策の１つの方法として外国人材の活躍について検討されていること、また、その前提となる日本政府の制度や施策を受けた県の取組み内容について高知県雇用労働政策課の職員にご講義いただい

た。

「講義を聞いて高知県の多文化共生に向けた取組みに関する理解度」についての受講生の感想は、「高知県に住んでいる/働いている外国人に提供するサービス、特に外国人生活相談センターの設立、新たな在留資格はどのようなものなのか、どんなインパクトがあるかについて学べた」（理１年M）、「在日外国人が増えていることやどこの国の人が多いかなど今まで知らなかったことを知ることができた」（農１年F）、「高知県外国人生活相談センターの設立や『特定技能』による外国人労働者の受け入れなど共生に向けた取組みを色々やっているなと感じた」（理１年M）、「自分が今までに勉強したことのない分野だったので勉強になる部分が多かった」（地域２年M）等があった。これらの受講生のコメントからも分かるように、講義を通して高知県の外国人材の活用に向けた取組み状況についてよく理解できたと考えられる。

また、授業の満足度については、「資料が丁寧に作られていて、プレゼンもその資料に沿って行われたため、わかりやすかった」（教３年M）、「資料の中に具体的な内容が多く、理解しやすかった」（地域２年M）、「今回の授業を受けるまで、外国人生活相談センターがあることは知らなかった。また、高知県（日本）は在日の外国人を増やすために、外国人でも住みやすい環境を作るために工夫したところを今回の授業のおかげでわかった。自分も外国人なので、少し感動した」（理１年M）等のコメントがあり、満足度の高い講義であったことが分かる。

ビジターセッション④では、「多文化共生社会における日本ビジネススタイルの変化」というテーマで、少子超高齢社会を背景に、日本企業を取り巻く環境や日本企業の内部変化、働き方の多様化、さらに就職活動における大きな変化、また、就職する際の企業の採用選考及び直接選考の「面接」についてもご紹介いただき、オンライン（Web）面接や対面面接で学生が気を付けるべき点等について実際に役立つ情報をお話しいただいた。

講義を聞いた受講生の「日本企業の働き方の変化に関する理解度」については、「これまでの変化についてもだが、日本企業がコロナという社会変動後どのように変わるのかというのは興味深かった」（地域２年M）、「新型コロナウイルスによって在宅ワークへの変更や個人の生活に合わせた勤務時間帯の変化などがよく理解できた」（教３年F）、「就職するために自分たちが何をしなければならないのか、どのようなことに気を付けなければならないのかがわかった」（教３年F）、「企業がコロナの影響でどのようなスタイルにしよう

としているかを知れた」（理１年M）、「企業が求めている人材の話を聞いた際に、多文化を理解できることが大事とあり、企業が求める人材が昔は利益だけを求める会社が多いと感じていたため、大変驚いた」（地域２年F）等のコメントがあり、講義を通して日本企業の働き方の変化に関する理解度が深まったと考えられる。

また、ビジターセッション④の授業の満足度については、「高齢化を見越した雇用の延長や出戻り入社、その他社員の多様なニーズに応えようと変化している日本のビジネス社会の様子を知ることができた」（教３年F）、「面接を受ける際の気を付けるべき点や、社会の変動について知ることができた」（教３年F）、「資料などもとてもわかりやすくて、国際化が進む中での日本企業の変革やこれから求められるものを掴むことができた」（教３年M）、「将来の日本における企業はどのような企業になるのか、どのように変化していくのかを理解できた」（理１年M）等の感想が寄せられ、満足度の高い講義であったことが見受けられる。

4-2 多文化共生社会に関する体験活動（企業見学）

企業見学は高知県中小企業団体中央会による全面的なサポートの下、株式会社第一コンサルタンツ及び株式会社高知丸高の協力を得て実現したものである。＜表１＞のシラバスに示した通り、学期当初より①「私が考える地域との互恵関係を構築するための方策」、②「私が考える多文化共生社会における地域振興の方策」の二つのテーマを受講生に提示し、最終発表並びに最終レポートは上記二つのテーマから一つ選び、発表並びに考察を行うことになっていたため、体験学習の一環として行われた企業見学は課題を考えるヒントとなるべく企画されたものであり、また、将来的には高知に就職するきっかけになるという狙いも込められている。実際、＜表５＞の設問３では「チャンスがあれば両社に就職したいか」と尋ねたところ、回答者13名のうち、第一コンサルタンツについては「そう思う」が２名、「ややそう思う」が４名で合計６名、高知丸高については「強くそう思う」が１名、「ややそう思う」が３名で合計４名が興味を示しており、企業見学を通して地域の企業の理解に繋がったと言える。

企業見学ではまず株式会社第一コンサルタンツ本社を訪問し、動画による会社紹介を視聴後に社内施設並びに防災設備の見学を行った。その後、株式会社高知丸高防災機材センターに移動し、会社概要・事業説明（防災・海外

展開）等の説明を受け、防災機材や技能実習生の宿舎を見学した。その後、海外人材講習センター（岡豊苑）にて「外国人とともに魅力ある会社を目指して」というテーマでトークセッションを行った。両社訪問の折、株式会社第一コンサルタンツでは代表取締役右城社長と高知大学の卒業生（元留学生K氏）、株式会社高知丸高では代表取締役高野会長と高知大学の卒業生（元留学生C氏）にそれぞれご対応いただいた。トークセッションでは、同４名の方にご出席いただいた。まず、株式会社高知丸高代表取締役高野会長が「外国人材への思い」というテーマで技能実習生を受入れるきっかけ・実習生の活躍・魅力、高度人材を受入れたきっかけ・高度人材の活躍・魅力、外国人材における現在の課題についてお話しいただいた。続いて高知大学元留学生C氏とK氏がそれぞれ高知丸高・第一コンサルタンツで働くまでの経緯やなぜそれらの企業を選んだか、会社の魅力、高知県・日本の魅力についてそれぞれ語られた。その後、質疑応答では、受講生から４名に対していろいろな質問がなされた。

＜表５＞　企業見学活動における評価

NO	振り返りシート内容	5	4	3	2	1	平均値	回答数	不参加
1	①今回の企業見学で第一コンサルタンツのことがよく分かったか	6	3	4	0	0	4.2	13/15	2
	②以前から第一コンサルタンツのことを知っていたか	1	-	6	-	6	2.2	13/15	2
2	①今回の企業見学で高知丸高のことがよく分かったか	6	3	4	0	0	4.2	13/15	2
	②以前から高知丸高のことを知っていたか	1	-	5	-	7	2.1	13/15	2
3	① チャンスがあれば、第一コンサルタンツに就職したいと思うか	0	2	-	4	7	1.8	13/15	2
	②チャンスがあれば、高知丸高に就職したいと思うか	1	0	-	3	9	1.5	13/15	2
4	企業見学を通して高知大学の卒業生の社員の方と交流ができたか	4	3	5	1	0	3.8	13/15	2
5	今回の活動を通して、(他の)留学生との交流が深まったか	1	2	3	4	1	2.4	11/15	2
6	今回の活動を通して、(他の)日本人学生との交流が深まったか	4	2	5	2	0	3.6	13/15	2
7	活動評価①全体	7	4	1	1	0	4.3	13/15	2
8	活動評価②第一コンサルタンツの見学	8	2	2	1	0	4.3	13/15	2
9	活動評価③高知丸高の見学	5	3	4	1	0	3.9	13/15	2
10	今回の企業見学のトークセッションの満足度	5	5	1	2	0	4.0	13/15	2

注１：１-②、２-②は、「知っていた」、「名前だけ知っていた」、「知らなかった」の３段階評価
注２：３-①、３-②は「強くそう思う」、「そう思う」、「ややそう思う」、「思わない」の４段階評価

企業見学活動についての「振り返りシート」の評価は＜表５＞に示す通り、項目７、８、９、10の活動評価に対する満足度が高かったことが窺える。企業見学全体の満足度が4.3ポイントと高く、「これからの企業選びの参考になった」（地域２年F）、「全体を通して、企業を知ると言うよりも知見が広がると言う方で面白かった」（地域２年M）、「高知県内にこのような取組みを行っている企業があるというのを、とても詳しく知ることが出来た」（人２年F）、「両社のことや外国人従業員の方々がどのように考えているかを知れた」（理１年M）、「日本で働く外国人の方から貴重なお話を伺うことができた」（農１年F）、「地域とともに生きる企業を目の前で見ることができた」（教３年F）、「現代社会に求められるような変革を大切にしている２社を訪れることができた」（教３年M）等の理由が挙げられた。また、「会社の概要説明や外国人社員の方のお話は大変分かりやすかったが、２社を見学するには全体的に時間が短いと感じた」（教３年F）、「もっとグループワークの時間と質問の時間を確保して欲しかった」（地域２年F）のようにより深い交流を望む意見もあった。

その他、記述のみの設問として「今回の企業見学やトークセッションを通して、高知の産業を振興させるためにどのような取組みが必要か」に対する受講生の回答は、「外国人を高知に馴染ませるのではなく、共に新しい文化を作る」（地域２年F）、「外国人にとって魅力的な会社を作らないといけないと思う。魅力のある会社であれば、外国の人材でもその会社で働きたいと思う。私も外国人で、高知丸高及び第一コンサルタンツの見学に参加して、そのような会社で働きたくなった」（理１年M）、「外国人の視点から高知の良さを上げてもらい、日本人との感じ方の違いを見つけ、外国人も暮らしやすいような支援をしていければ良いと思う」（農１年F）、「外国からみて高知はまだまだ知名度が低いので、今回のように実際に高知で暮らしている外国人の方のお話を海外に発信して、高知を選ぶきっかけにできれば良いと思った」（教３年F）等のような具体的な提案があった。

一連の活動を通して、多文化共生社会において、高知県の取組み状況を理解するとともに自分たちがどう対応していくべきかを考えるきっかけになったのではないかと思われる。

５．グループ発表

最終発表は四つのグループに分かれて、「地域との互恵関係を構築するための方策」と「多文化共生社会における地域振興の方策」の二つのテーマから一つ選び、体験学習等を通して感じたこと、考えたこと、また調べたことについて地域の産官学の関係者の参加の下、オンライン（Teams）で発表してもらった。

Aグループは「多文化共生社会について」と「地域との互恵関係」の二つのテーマについて発表し、多文化共生社会における方策については「異文化交流ができる場所の設置」、「相談場所や語学勉強所の機会の充実化」、「外国人向けの保育施設の設置」等が提案された。そして、地域との互恵関係の構築については「防災や商品開発、食、文化交流などの活動を通して、地域との互恵関係をつくる」という提案があった。

Bグループはまず「地域文化理解」で学習した高知県や大豊町の現状と課題、高知県や安芸地域の観光、そして企業見学先の第一コンサルタンツと高知丸高の多文化共生への取組みについてまとめた。これらを踏まえて、「地域との互恵関係を結ぶための方策」として「高知大学と安芸桜ヶ丘高校との協働作業である観光産業の強化」が提案された。

Cグループは「地域との互恵関係を構築するための方策」というテーマで、「若者が住みたい街にするためには、若者がやりたいことに対して協力する仕組みづくりや協力してくれる人を集めることが必要だ。そうすることで町には活気が戻り、若者は自分の目標に向かって自由に前進できると考えた。また、地域の情報を発信をするにはSNSを活用することが最も効率の良い方法である」と述べられた。さらに、「都会行きの汽車の本数を増やす他、既存の施設を活用し、既にあるお店の一画を借りて自分のお店が開けるシステム“Shop in Shop”」という大変斬新なアイディアが提案された。

Dグループは「多文化共生社会における地域振興」をテーマに、「Instagramチャンネルの開設と多文化交流イベントの開催」を中心に発表した。そして、Instagramを選んだ理由や運営方法（インバウンド向け・在日外国人向け）、多文化交流イベントの開催（国際市）という具体策が提案された。

発表終了後「一番独創的な提言をしたグループ」と「一番発表がよかったグループ」について受講生を含め、参加者に投票してもらったところ、一番独創的な提言はCグループ、一番発表がよかったのはDグループがそれぞれ得票が最も多かったという結果になった。

６．授業終了アンケート結果

＜表6＞で示すように授業終了時に実施したアンケート結果では、項目４、５の「留学生との交流」についての評価を除き、概ね高い評価が得られた。前述した通り、2020年度は留学生の受講生が１名のみだったため、交流の機会が少なかったことが考えられる。

以下いくつかの主要な項目における受講生のコメントを紹介する。

まず項目１の「地域文化理解の授業を受けて、地域文化に対して理解が深まったか」については、4.1ポイントの評価が得られ、「講義や企業見学を通して他の地域の文化や感じていることなどを知ることができた」（農１年F）、「今まで見たことのなかった高知県の様々な側面を見られた」（地域２年F）、「この授業で高知の魅力、課題を発見できた」（理１年M）、「地域の人や外国人、行政の人など、さまざまな視点から地域文化を捉えることができた」（地域２年M）、「これまで異文化理解についてはあまり考えず地域社会について見てきたので、今回の授業は高知県の現状からどのようなことを考えている人がいるかまでわかったので、深まったと考える」（地域２年M）、「高知県をはじめとした、いろいろな地域で繰り広げられている仕組みを知ることが出来た」（人２年F）、「実際に企業見学をしたり、安芸市に行って現地の高校生と共に地域振興のための方策を考察したりと実践的な活動がとても充実していた」（教３年M）、「様々な地域の現状を知ることができ、また、高知県の企業がよりよい多文化社会を目指すため、何に取り組んでいるのか理解できた」（地域２年F）、「今までの学部での学び以外の視点を得られた」（地域２年M）等のような好意的なコメントが寄せられた。

項目８の「一連の授業の活動の満足度」については4.3ポイントが得られ、受講生から「地域の方と外国人の方が互いに文化を理解し暮らしやすくするためにどうすれば良いか自分なりの考えを持つことができた」（農１年F）、「この講義を通じて高知のことや課題を見つけることができた」（理１年M）、「他の授業と違って、教室から出て、色々なところに行き、色々な人と交流できた」（理１年M）、「コロナウイルスで一部活動が予定変更になった点が少し残念だったが、それ以外の知識、視点の広がりは自身にとって大きな成長になった」（地域２年M）、「グループワークやフィールドワークの中で、メンバーと対話を通して知見を広げることができた」（地域２年F）、「多様な文化、思想に触れることができ、その中で思考を続けることで得られたものがあると感じる」（地域２年M）、「学外授業を行っており、実際に体験しながら学習で

きた」（地域２年F）等のコメントが寄せられた。また、「実習などがあり、このコロナ禍だからこそありがたい授業だと思った。実習ができるように手続きをしてくれた先生方には大変感謝している」（教２年M）のような大変有難いコメントもあった。感染状況を見極めつつ、活動内容により対面とオンラインを使い分けながらプログラムを走らせたが、無事に対面で体験活動が行えたことは授業担当者としても安堵の一言に尽きる。

項目９の「一連の授業の活動及び最終グループ発表の満足度」については、①②⑤⑥⑧の講義及び④⑦の体験活動についてはいずれも4.1ポイント以上の評価が得られ、本課題の取組みが有効であったと言える。

また、＜表６＞には示していないが、地域の方からの要望に応じて、終了アンケートで「卒業後高知に残りたいかどうか」を尋ねたところ、回答者14名のうち、「はい」と回答したのは５名であった。将来この５名の受講生が高知に定住し、高知の活性化に寄与してくれることを願う次第である。

＜表６＞　終了アンケートの評価

NO	内容	5	4	3	2	1	平均値	回答数	不参加
1	「地域文化理解」の授業を受けて、地域文化に対して理解が深まったか	3	9	2	0	0	4.1	14/15	-
2	一連の活動を通して、高知の地元の人々との交流はできたか	3	7	3	1	0	3.9	14/15	-
3	高知の地元の人々との交流を通して、地域住民への理解が深まったか	4	4	5	1	0	3.8	14/15	-
4	一連の活動を通して、(他の)留学生との交流はできたか	2	2	3	6	1	2.6	14/15	-
5	他の留学生との交流を通して、他文化への理解が深まったか	2	6	2	3	1	3.4	14/15	-
6	一連の活動を通して、(他の)日本人学生との交流はできたか	6	5	3	0	0	4.2	14/15	-
7	(他の)日本人学生との交流を通して、他文化への理解が深まったか	4	4	3	3	2	3.6	14/15	-
8	一連の授業の活動の満足度	5	8	1	0	0	4.3	14/15	-
9	一連の授業の活動及び最終グループ発表の満足度								
	① 高知の現状と課題に関する講義	4	7	2	0	0	4.2	13/15	1
	② 大豊町の現状と課題に関する講義	4	5	1	1	0	4.1	11/15	3
	③ 交流活動事前学習(高校生が作成した動画視聴)	5	3	3	2	0	3.8	13/15	1
	④ 安芸観光・高校生との交流	7	4	1	1	0	4.3	13/15	1
	⑤ 異文化理解・異文化コミュニケーションに関する講義	5	6	0	2	0	4.1	13/15	1
	⑥ 高知における多文化共生社会及び地域振興に関する講義	4	6	3	0	0	4.1	13/15	1
	⑦ 企業見学(第一コンサルタンツ・高知丸高)	4	6	3	0	0	4.4	13/15	1
	⑧ 多文化共生社会における日本ビジネススタイルの変化に関する講義	3	9	2	0	0	4.1	14/15	-
	⑨ 最終グループ発表会	1	9	3	1	0	3.7	14/15	-

注１：５段階評価
十分　←　５・４・３・２・１　→　不十分
理解が深まった　←　５・４・３・２・１　→　理解が深まらなかった

７．終わりに

2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、交換留学生の受入れの一時中止に伴い、受講生は日本人学生が中心となったが、本授業の取組みとしては「多文化共生社会」という新しい視点で地域振興を考える内容構成を付け加えた。また、これまでは体験活動実施後に行われていた振り返り活動を、今回はビジターセッションについても授業の一環として行った。振り返り活動の実施方法もペーパーからウェブフォームに回答する形に変更し、３、４、６節で紹介した受講生のコメントからも読み取れるように、授業担当者が意図している授業の狙いをしっかりと汲み取った上で自らの考えや気付きを述べていたものであったと思われる。本授業を通して受講生個々人が地域の現状や課題を認識し、自分事として地域との互恵関係の構築や多文化共生社会における地域振興について解決策を提案するに至ったと言える。

授業の最後に、受講生は「私が考える地域との互恵関係を構築するための方策」と「私が考える多文化共生社会における地域振興の方策」の二つのテーマから一つ選び、レポートをまとめた。それぞれのレポートが地域との互恵関係や地域振興を真剣に考える内容となっていた。ここにその一部を紹介する。

＜受講生のレポート①＞抜粋（教３年F）
テーマ：「私が考える地域との互恵関係を構築するための方策」

これまで授業で得た知識や、実際に目で見た物事から、私が考える地域との互恵関係を築くための方策として、「高知県で若者が住みやすく働きやすい”Shop in Shop”のシステムの展開」を提案しようと考える。

このシステムは、既にあるお店の一画を借りて、違うお店を出店するというもので、よく見られるのは本屋の中にカフェが入っている事例である。このシステムは、お店の一画を貸す側と借りる側が相互に利益を得られることから、新たに出店したい人や自分の店を開く前にある程度の固定客を得たい人が商売をしやすい仕組みとなっている。高知県の場合では、商店街の店の中に違う店を設けることによって、シャッター街となっている地域は活気を取り戻したり、高知県の名産を用いた商品を販売することによって、高知県の名産品に対する知名度がより上がるのではないかと考えられる。

これらの事から、地域との互恵関係を築くための方策として、”Shop in Shop”を提案したが、このシステムが高知県内でより広まることによって、生

産者と販売者、また店の一画を貸す側と借りる側の両者が利益を得られたり、新たな挑戦をする若者の第一歩を応援できることから、高知県の経済を発展させるとともに、若者の県外流出を少しでも食い止めることができるのではないだろうか。今回、地域との互恵関係を築くための方策を考えるうえで、高知県の現状や課題を知るとともに、高知県の魅力をより伸ばせられるような方法を生み出すことが大切だと感じた。

＜受講生のレポート②＞抜粋（地域２年F）
テーマ：「私が考える地域との互恵関係を構築するための方策」

私は地域との互恵関係を構築するためには高齢者と子どもをつなぐことが必要だと考える。地域との互恵関係を構築するには、他県よりも多い高齢者の方々に協力してもらうこと、そして他県よりも少ない子ども達を大切に育てていくことが大切なのではないかと考える。私の考える互恵関係とはお互いのメリットが目先だけにあるのではなく、将来的にも役立つようなメリットをお互いに感じられることである。このような関係を構築するための方策として、私は放課後子ども教室を高齢者主体で開くことを提案する。

現代の子どもたちは共働き家庭や片親家庭によって学校から家に帰っても一人になってしまったり、貧困によって塾に行けなかったりする子どもたちが増えている。そのような子どもたちが放課後に過ごす場として放課後子ども教室というものがある。放課後子ども教室とは市区町村が中心となり作る、放課後にすべての子どもたちが自由に安心して遊んだり、宿題をしたりすることができる場である。

高齢者は地域内でのつながりが減ってしまいやすく、人との関わりが減ってしまうと自分が社会的に必要とされているのか、何のために生きているのかわからなくなってしまいやすい。

このような子どもたち、高齢者の現状を踏まえて私が考えた互恵関係を構築するための方策は放課後子ども教室を高齢者主体で開くことだ。ここでの指導員、補助員を市の職員などがするのではなく、地域の高齢者がすることで子どもたちにとって親近感を感じられ、遊び、勉強をさらに楽しむことができるのではないかと私は考えている。子どもたちと高齢者は育った環境が全く違うため、お互いの言葉遣いや遊び、生活リズムなどを知ることで考え方の幅を広げることができ、さらに人生が楽しくなるのではないだろうか。

＜受講生のレポート③＞抜粋（人２年F）
テーマ：「私が考える多文化共生社会における地域振興の方策」

私はこのテーマを考えるにあたって、主に地域における観光事業について着目して考えることにした。

まず１つ目は、日本国内に限らず、海外にいても観光業そのものを直接支えることが出来るような仕組みを作る、ということである。例えば、高知県でそのような活動を行っている観光地というと、桂浜にある、桂浜水族館である。桂浜水族館は、常にTwitterやFacebookなどのSNSを活用して、マスコットキャラクターの「おとどちゃん」目線で、水族館の魅力をユニークに発信し続けた。そして中では、桂浜水族館で買うことが出来るお土産を自身のSNSアカウントを通して販売したり、水族館の写真集をAmazonや全国の書店で販売したりなど、直接水族館に来ることが出来なくても、インターネットなどを利用することで、遠くに住んでいるお客さんに対してもサービスの提供を行うことが可能になったのである。

「バーチャル旅行ツアー」というものが最近では注目されている。これは、スマートフォンの画面やVRゴーグルを活用して、静止画・ストリートビュー・動画などを見るなどすることで、実際にその場所に行って旅行した気分になれるというものである。これには様々な手段があり、実際の旅行に行った目線になれるように、料金を払って、現地の人がカメラを持って旅行を行い、それをリアルタイムで配信するというものや、YouTubeに観光した際の動画を挙げて、わざわざ料金を支払わなくても、誰でも旅行した気分になれることが出来るというものもある。その中で、高知県では、まずはYouTubeを利用した「バーチャル旅行」を積極的に活用していき、それをきっかけに高知県の観光に興味を持ってくれた人には、有料の「バーチャル旅行」サービスのサイトに誘導をして、そこにお金を入れてもらって、引き続き観光を楽しんでもらう、という仕組みを作っていくべきであると考える。先ほども述べたように、まずYouTubeに動画をアップすることで、誰でも無料でバーチャル旅行を体験することができ、なにより、気軽に旅行動画を見てもらうことで、より多くの人に、高知県の観光に興味を持ってもらいやすくなるだろう。興味を持ってくれた人には、新型コロナの影響による自粛期間が明けたら、実際にも高知県に訪れたい！と思ってもらえるように、引き続き高知県の観光地などにまつわる魅力を発信していくべきなのだ。一方で、観光業に従事していて、このコロナ禍で仕事が激減してしまった労働者もたく

さんいると思うので、そのような人を中心として動いてもらって、有料の生配信型「バーチャル旅行」コンテンツを充実させていけば、観光業の衰退を少しでも防ぐことにつながるのではないか、と考えた。

特に高知県のように、このままだとどうしても人口の減少などによって、衰退していってしまうような地域の振興について、その支えを日本全体、世界全体で出来るような仕組みを作っていくべきである、ということである。これらの仕組みは主にインターネットを活用することが出来るものであり、最近では、インターネットは都会でも田舎でも関係なく通っているものでもあるので、誰もが気軽に利用することができる。新型コロナの影響で社会でのリモート化が進んだことで、交通の便の悪さなどの、田舎ならではのデメリットがあまり目立たなくなっているので、この機会に、誰がどの場所にいても、地域振興に気軽に参加できる仕組みを作っていくべきなのである。

＜受講生のレポート④＞抜粋（理１年M）

私が考える「地域との互恵関係を構築するための方策」&「多文化共生社会における地域振興の方策」

今回は私が考える地域との互恵関係を構築するための方策・多文化共生社会における地域振興の方策について紹介していこう。

まずは地域との互恵関係を構築するための方策についてだ。まず一つ目にSNSを使うことだ。知られることから始まる互恵関係もあるだろう。また地域同士の共同開発も地域との互恵関係になるだろう。そして地域内・外の人との互恵関係として一つ目に防災活動による互恵関係の構築である。防災活動は高知にとってうってつけだと考える。日本では将来南海トラフ地震が起こるとされている。高知ではそれによる大津波による甚大な被害が起こると予想されている。そのためにも避難訓練は重要である。避難訓練をする・しないによって生存率は相当変わると私は考える。地域の人たちみんなができるように避難訓練を定期的にではなくとも少なくとも春休み、夏休みの時期の年二回することで交流となり互恵関係を作れるのでないだろうか。二つ目に食を使った互恵関係の構築だ。例えばある地域の中学生と違う地域の小学生でそれぞれの地域の作物を使って一緒に料理をする交流会を夏休みなどの時期に開くことだ。実際に違う県ではそれが行われている。それをするとまず学校相互の関係を深めることができ、互恵関係を作ることができる。またそれぞれの地域の食についても知ることができこれから地域を担っていくだ

ろう学生においても良い体験になるであろう。

次に多文化共生社会における地域振興の方策についてだ。インスタグラムを用いて、まず訪日外国人に向けては県でも町でも公式のアカウントを作成し、県やその街の観光スポット、飲食店、イベント情報などを写真や文章で投稿したり、独自の#（ハッシュタグ）を作成したりする。また地元の人たちにも写真提供などをしてもらい協力してもらうと、地元の人たちの訪日外国人に対する意識が強まりより盛り上がるのではないだろうか。次に在日外国人に向けては外国人からよくある質問をQ&A方式で答えてそれをインスタグラムに画像で投稿する。その質問は在日外国人にインタビューしたり、インスタグラムのストーリーのインタビュー機能を使って集めたりする。さらに観光地は何があるのか、おいしいものは何があるのかのような質問だけではなく、インタビュー機能を使い、住んでいて困っていることなど相談会のような感じで質問を集めてそれに答える方式も良いのではないだろうか。この相談会は地元の人たちが行きやすい市や村の役場でも開くことができる。相談会で住んでいる中で困っていることなどの質問を集めたり、逆にどういうイベントを開いてほしいか、どのようにすれば自分が住んでいる町がよりよくなるだろうかを質問し意見をもらうこともいいだろう。今までも開かれていたのは知っているが、この相談会を一か月、二か月に一回くらいのスパンで行うことを提案したい。そして相談会のように外国人に寄り添うようなものとして、普段の生活面では色々な国のメニューや色々な国の店員がいる異文化交流カフェや多文化子育て施設などの日本人が外国のことを知れるような施設や在日外国人が行きやすい施設をもっと建てるべきだ。

注：文中で引用した受講生の所属は、以下の通りである。

・人〇年MorF＝人文社会科学部〇年生男性or女性
・教〇年MorF＝教育学部〇年生男性or女性
・理〇年MorF＝理工学部〇年生男性or女性
・地域〇年MorF＝地域協働学部〇年生男性or女性
・農〇年MorF＝農林海洋科学部〇年生男性or女性

付記

本活動は、国際連携推進センターの運営費交付金を活用し実施された。なお、学生アンケート及びレポートの文章は読みやすいよう授業担当者による修正を施し

た。

謝辞

本プログラムの実施に当たり、講義については、ビジターセッション①と③では高知県産業振興推進部計画課長尾様及び高知県商工労働部雇用労働政策課北條様、ビジターセッション②では集落活動センター「そばの里　立川」の立川地区活性化推進委員会委員長吉川様並びに大豊町役場プロジェクト推進班笹岡様、中岡様、ビジターセッション④では成蹊大学経営学部鈴木教授のそれぞれのご協力を得て実施された。体験学習については、高知県立安芸桜ケ丘高等学校情報ビジネス科の先生方並びに生徒の皆様、企業見学では株式会社第一コンサルタンツと株式会社高知丸高のそれぞれのご協力を得て実施の運びとなった。また、プログラム全体の構想や運営について、高知県中小企業団体中央会連携推進部の古木様、高瀬様にいろいろとお力添えをいただいた。この場をお借りして本プログラムの実施にご協力くださった皆様方に感謝の意を申し上げます。

参考文献

林翠芳・大塚薫・ガルシア デル サス エバ（2020）「体験学習を通した留学生と日本人学生の国際共修授業―地域との互恵関係の構築を目指した主体的な学びの場の形成―」『高知大学留学生教育』第13号、pp.55-86

林翠芳・大塚薫・ガルシア デル サス エバ（2018）「留学生と日本人学生の共修による地域文化理解・地域交流を柱とした体験学習型授業の構築」『高知大学留学生教育』第12号、pp.23-43

林翠芳・大塚薫・ガルシア デル サス エバ（2017）「体験学習を通じたアクティブ・ラーニング型授業の構築」『高知大学留学生教育』第11号、pp.77-90

大塚薫・林翠芳（2019）「インタビュー活動による地域住民との交流を主軸とした体験学習型授業の構築―国際共修による双方向往来の学びを通して―」ウェブマガジン『留学交流』2019年９月号 Vol.102 pp.13-24

大塚薫・林翠芳（2018）「高大連携による地域文化体験を通した交流学習活動の教育効果―地域文化理解を目的とした高校生と留学生との交流を主軸として」『高知大学留学生教育』第12号、pp.45-77

大塚薫・林翠芳（2018）「インタビューによる地域住民との交流を主軸とした体験学習型授業の構築」『第23回JAISE年次大会（研究大会・総会）proceedings』pp.#32-5-1-2

大塚薫・林翠芳（2017）「グローバルな視点に基づいた体験型プログラムの構築―地域文化・観光体験調査の結果を通して―」『韓国日本語学会第35回国際学術発表大会論文集』、pp.115-120
大塚薫・林翠芳（2016）「日韓中協定校体験型プログラムの実践と課題―高知文化事情に触れる体験を通して―」『韓国日本語学会第33回国際学術発表大会論文集』、pp.100-105
島崎薫（2018）「地域住民との国際共修で留学生は何を学んだのか―仙台すずめ踊りの実践を通して―」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第４号、pp.397-406
島崎薫（2017）「地域住民との国際共修―留学生のアイデンティティの変化に着目して―」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第３号、pp.227-237
末松和子（2014）「キャンパスに共生社会を創る―留学生と日本人学生の共修における教授法の確立に向けて―」ウェブマガジン『留学生交流』Vol42、pp.11-21
総務省（2017）『多文化共生事例集～多文化共生推進プランから10年 共に拓く地域の未来～』
https://www.soumu.go.jp/main_content/000476646

LIN Cuifang
（高知大学国際連携推進センター国際連携教育部門教授）
おおつか　かおる
（高知大学国際連携推進センター国際連携教育部門准教授）